

司式:野呂 智子
奏楽:山田 絵里

前奏:「いと高きところには栄光神にあれ」(J.S.バッハ)

招詞:神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。(Iテモ 3:15b)

讚美歌 19「み栄え告げる歌は」

罪の告白・赦し

聖霊を求める祈り

朗読聖書①申命記7:6-8

◆神の宝の民

- 06 あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。
- 07 主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。
- 08 ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。

朗読聖書②使徒言行録1:6-14

◆イエス、天に上げられる

- 06 さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。
- 07 イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。
- 08 あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」
- 09 こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。
- 10 イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、
- 11 言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

◆マテアの選出

- 12 使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。
- 13 彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。
- 14 彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。

祈祷

聖なる、主なる神さま、あなたの聖名を賛美致します。聖霊降臨節を迎え、私たちはあなたの霊の導きを深く覚える日々を過ごしております。今朝も、こうして私たちを教会へと招いてくださり、ありがとうございます。あなたはイエス・キリストを通して、あなたの御心に適う生き方を示し、

主イエス・キリストの十字架と復活をもって罪深い私たちを見捨てることなく、希望の道を与えてくださいました。そして聖霊により、今も生きて働く神さまの導きを日々注いでくださっています。その測り知れない御慈しみを心から感謝致します。にも拘らず、私たちはあなたに従うことが充分ではなく、様々な罪を重ねています。どうかこの礼拝が私たちの悔い改めの場となりますように。また、あなたの栄光を賛美し、福音を語り伝える者となりますようにお導き下さい。

本日は信濃町教会創立100周年の記念礼拝をお献げしております。今から丁度100年前、あなたは高倉徳太郎牧師を導き、この教会を立ててくださいました。多くの先達が礼拝を献げ、祈り、御言葉を糧に世に仕え、信仰を継承しつつ100年の時を重ね今日を迎えております。その間には、幾多の困難があり、時には命をかけて宣教の業に力を尽くされた牧師先生方、信仰の先輩方、お一人おひとりの働きがありました。あなたがこの教会を用いてくださり、この地で宣教の働きを続けていけることを“善し”としてくださいましたことを、心より感謝申し上げます。天に召された多くの先達と共に地上に生きる私たちが、新しい友、久しぶりに戻って来た友、オン・ラインの友と共に、あなたによって一つに呼び集められ、今日の記念礼拝がお献げ出来る大きな恵みを心より感謝申し上げます。この礼拝が、あなたへの賛美と感謝に充ちたものとなりますように。

あなたの御言葉を取り次ぐ佃雅之牧師を聖霊で充たし、福音が力強く語られますように。聴く私たちの心を開き、御言葉が心深く届くようにしてください。今日この場を覚えながらも様々な事情によってこの礼拝に出席できない友が居ります。どうぞその友を顧みてくださり、夫々の場において主の豊かな愛と恵みの中に置いてください。

平和の造り主なる神さま、今、この世界には多くの争いや、地震、災害、貧困、環境破壊など様々な苦しみ渦巻いております。日常生活の中にも、病、老い、親しい人との別れ、思うようにいかないことなどへの苦しみがあり、数え上げたらきりがありません。私たちに解決策など到底見出すことの出来ない過酷な状況にあります。この世にイエスさまが身を以て教えてくださった愛と平和が満ちることを心から願います。あなたは私たちにたくさん恵みを与えてくださっています。不平、不満を語ることが多いですが、こういう辛い困難な時こそ、あなたから与えられている恵みに気づかせてください。自分に与えられたできる力を他の人のために使う豊かさに気づかせてください。

今日、此処に集う私たちに、御言葉を糧として、希望をもって歩む毎日を示してください。キリストの平和が少しずつでも広がっていくように、私たち一人ひとりに勇気を与え用いてください。これからもこの教会が未来に向けて信仰を継承しつつ、世に、人に仕える教会として歩み続けることが出来ますよう聖霊の導きを願い祈ります。

この感謝と願いを私たちの救い主イエス・キリストの聖名によってお献げ致します。アーメン。

合唱 〈感謝せん〉 聖歌隊

説教:「新たな出発のために」

佃 雅之

今から100年前、1924年6月1日午後2時、当教会の創立者高倉徳太郎牧師の自宅に20名余りの同志が集まり最初の礼拝が献げられました。信濃町教会がキリストの伝道命令に従い、「地の果てに至るまで」福音を宣べ伝える

ために新たに出発した日です。信濃町教会は、“いかなる人間的な束縛にも左右されない、主の福音のみが自由に威力を奮う教会を立てたい”との高倉牧師の願いによって始まった教会です。“教会は、神の国の拠点であり、出発点、十字架の福音によって聖霊の働く所、神の支配によって生かされる者たちの集まり”、それが高倉牧師の語られた教会の姿です。

教会が誕生するということは神の業であります。信濃町教会も神によって立てられた教会です。神は何故、教会をこの地上に立てられたのか、その意味が、今日司式者によって朗読されました使徒言行録の個所に記されています。福音書に続いて『使徒言行録』を書いたルカは、「さて、(μέν οὖν)」という短い言葉から教会の始まりについて語り出します。聖書の中には何度も書かれています場面や話題を変えるために使われるさりげない言葉の一つです。しかし、此処での「さて、」はとても重い意味を持っています。「さて、」という小さな言葉で為される場面転換は、“私たち教会にとって、この世界の歴史にとっての大転換点、新しい時代の幕開けを告げる言葉” だと言っていいでしょう。キリストの地上での働きが書かれています福音書では、キリストが顔と顔を合わせて弟子たちに直接語り掛けてくださいました。しかし福音書に続く使徒言行録では、この場面を最後にキリストが弟子たちに直接語りかけることはもうありません。キリストは天に上げられ姿を目にすることが出来なくなるからです。キリストと直接お会いすることの出来ない時代が始まります。私たちも、此処に記されています「さて、」という言葉で始まる新しい時代の中でキリスト者として生きています。

高倉牧師は、最初の礼拝を献げる前日、「感謝して進め。明日はいよいよエクレンシアを始めんとす——この上に主の導きを絶えず祈り求めよ。主の栄がこれによりて現れんことを、」と祈られ、教会を始められました。今日の個所の冒頭にルカが記した「さて、使徒たちは集まって、」とある通りに、教会を始められたということです。

キリストは十字架につけられて死に葬られました。約束された通り、三日の後に復活し甦られました。復活されたキリストは、裏切り、逃げ去り、閉籠っていた弟子たちを立ち直させます。しかし、これからの弟子たちはキリストと直接語り合うことの出来ない新しい時代の中を歩んで行かなければなりません。その点で弟子たちは最大の危機と直面しています。彼らが復活のキリストに、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねています。彼らはまだ『神の国』を理解できていません。地上の国のこと、しかもイスラエルのことだけを考えています。この時の弟子たちの思いは、“キリストは復活したのだから、神の国は完成したのではないが”、“神の救いの計画は実現したのではないが”と考えていたようです。しかし神の計画が実現し、完成する終わりの時は何時なのか、私たちには分かりません。神の国が完成する時は、父なる神が「お定めになった時」です。キリストは彼らに、「あなたがたの知るところではない」と言われます。人は知りたいという欲望を信仰によって克服して、神の御意思に委ねることを知らなければなりません。信仰は知ることではなく、神に委ね、信じることであるからです。私たちは神の「お定めになった時」まで待たなければなりません。

キリストは此処で「神の定められた時」を秘密にされますが、私たちがしなければならぬことをはっきりと命じられます。それが8節の「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と言われたキリストの言葉です。このキリストの“伝道命令”は、新しい時代の弟子たちの生き方です。今の私たちに向けても語られている言葉です。この事が、神が教

会を立てられた意味です。

キリストは彼らに、つまり教会に聖霊を降すことを約束してくださいませ。聖霊が降らなければ力を得ることは出来ません。力を得なければキリストの証人になることは出来ないのです。教会は聖霊に導かれ、力を得て主の御業をこの世において継承することになります。キリストの証人になるということは、御言葉に聴き従い、主に全てをお委ねする日々の生活の中で、自分自身が実際に経験した事実をそのまま語り伝えることです。

使徒たちの時代から2000年、信濃町教会においても100年、数えきれないほどのキリストの証人たちによって福音が宣べ伝えられてきたのです。夫々の時代に、様々なキリストの証人が立てられ、またその証人たちが神の召しに答えて、生き抜いて、教会の歴史は築き上げられてきました。私たちがその流れに繋がる者として今ここに集められています。「さて、」という言葉で始まった新しい時代は、“いよいよエクレンシアを始めんとす”という言葉で信濃町教会に語り継がれ、私たちは、今も、神の国の完成の時を目指して歩んでいるのです。

信濃町教会が最も大切にしてきたことは、高倉牧師がこの教会に伝え、この教会に託した“預言者的・福音的キリスト教”であります。「預言的」とは、神が人間のために注がれる恵みは、単に人間のためばかりではなく、神ご自身の計画実現のためであることを意味しています。神は、私たちを用いて、されたいことがあるのです。「福音的」というのは“人間から神に達する道はなく、神の自由な恵みによってのみ、人間は救われる”ということを表すものです。“神の恵みは人間のため”、ということを強調する立場です。私たちには“預言者的・福音的キリスト教”を継承して、宣教の業に励むことが求められています。

8節に「地の果てに至るまで」とありました。「地の果てに至るまで」というのは“遠い所に向いていく”という意味はありません。あなたの生活の中で“キリストの証人として生きる”ことを命じている言葉です。今日で地上での命は尽きるのかも知れませんが、その日、その時、私たちが置かれている所が常に「地の果て」なのであります。“今、生かされている夫々の場所が、主が共におられる場所”、“主が生きて共に働いてくださる場所”です。だから主は、今日も私たちに「行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい(マタ28:19)」とされています。

しかし、この時の弟子たちには、新たに出発するために、まだ知るべきことが残されていました。9節に「こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられた」とあります。キリストが昇天される場面です。彼らはキリストが天に上げられることを確かに見たのです。疑いのような事実として。彼らは昇天の目撃者になることで、キリストが栄光の座に着かれたことを疑うことなく宣べ伝えることが出来るようになったのです。キリストは天に上げられて、尚、誰よりも近くに居て助けてくださる、天に上げられたことで私たちは見て信じるのではなく、“御言葉と聖霊によってキリストを知り、キリストと交わる”という大転換が興された瞬間を伝えています。つまり“キリストは今も生きておられる”という証言が出来る者とされたということです。主が再び来られる時まで、目にすることが出来なくても信じる事が求められる時代が始まったのです。

信濃町教会も、これまでに牧師や長老の交代、多くの信仰の先達の逝去によって、新しい時を迎えるという経験をしてきました。様々な事情でこれまで出来てきたことが出来なくなるということもあるでしょう。今までとは、同じようにはいかないこともあります。今の私たちに何が出来るのか、何ができないのか、何をしなければならぬのか。私たちは信濃町教

会が神の栄光を表すために真剣に検討し、思いを一つにすることが求められています。

キリストの昇天は 12 節によると、「オーブ畑」で興ったことがわかります。キリストが捕えられ、十字架に磔にされる直前に、「父よ、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください(ルカ 22:42 並行)」と、祈った場所と同じ所です。弟子たちはこの場所から逃げ出し、キリストを裏切りました。弟子たちが躓いた場所が、この「オーブ畑」です。彼らは、その「オーブ畑」からキリストが命じられた“エルサレムを離れず、父の約束されたものを待ちなさい(使 1:4)”との言葉に従うためにエルサレムに戻ってきました。エルサレムから弟子たちの新しい歩みが始まろうとしています。

13 節に「都に入ると彼らは、泊まっていた家の上の部屋に上がった」とあります。「彼らは」「地の果てに至るまで」福音を宣べ伝えるための備えとして、“一つの所に集まって礼拝をしていた”ということです。キリストが復活され、天に昇られるという出来事を経験して、「彼らは」は聖霊降臨を待つ段階に入ります。十字架に怯え、逃げ出し、復活のキリストに出逢っても心細そうにしていた弟子たち、『終わりの日』の意味を理解できなかった弟子たちは、もうここにはいません。「彼らは」は“主の聖なる民”として、“神の宝の民”としてここに集められたのです。私たちも神に選ばれ、主の聖なる民として、神の宝の民として、今、信濃町教会に集められています。

使徒たちの泊まっていた部屋の二階が最後の晚餐を主と共に過ごした場所であったとしたら、その事も意味の深いことだと思います。キリストは晚餐の席でパンと杯を分け与えられた後、「わたしを裏切る者がこの食卓に手を持っている(ルカ 22:21)」と言われていました。確かにこの時の弟子たちは、夫々に問題を抱え、弱さや欲に塗れていました。しかし、十字架と復活、キリストの昇天を経験し、躓きを乗り越えて、再び、同じ部屋に集まり、これからは“キリストの証人”として生きるために、新たに出発しようとしているのです。私たちもこの後、共に『聖餐』の恵みに与ります。聖餐と言いますとやはり『最後の晚餐』の出来事と結びつけて、主の十字架の死を思い起こし、その体と血によって、私たちの罪が贖われたことを思い起こします。しかし聖餐はキリストの十字架の死だけに結び付いているのではなく、キリストの復活、主の甦りの命と結びついています。聖餐は罪の贖いと赦しと共に、私たち一人ひとりに“新しい命が与えられる”ことを明らかにするものです。キリストの命を戴くことによって、私たちは躓きの場所に留まり、破れに踏み留まり、そこから主の証人としての歩みを始めることが出来るのです。

高倉牧師をはじめ教会に仕えた歴代の牧師が御言葉と格闘しつつ説教をし、また共に聖餐に与りながら、教会で興った悲劇とも向き合い様々な問題を乗り越えてきたことを思い出さずにはられません。同じ 13 節に、この時、御言葉に従い聖霊に導かれて集められた人たちの名前が挙げられています。“キリストの証人”のリストです。主の約束を待つ群れの名簿が明らかにされています。此処に丁寧に名前が挙げられていることの意味は、教会が『エクレシア』、“人の集まり”であることを教えているのです。今日の私たちなら受付で書いた名簿も“キリストの証人”のリストでしょう。教会の会員名簿に記された全ての人たち、関係教職、今は御国にある逝去会員を含めた信濃町教会 100 年の伝道の歩みに参与した全ての会員が“キリストの証人”です。

主の証人たちが新たな出発のためにするべきことは、“一つとなって主を礼拝する”ことです。私たちは礼拝によって新しい心の備えができます。キリス

トの約束を待ち望む力を得ます。宣教の力の源は礼拝にあります。教会の信仰は熱心に礼拝することによって未来へと繋がれていくものであるのです。私たちは『神の国』を目指してキリストの福音を宣べ伝える群れであり続けたいと願います。『終わりの日』まで礼拝を重んじ、聖餐を中心生命として主と共に歩んで参りましょう。

お祈りを致します。

聖なる神、今日此処に教会創立 100 周年を記念する礼拝をあなたにお献げできました幸いを心から感謝致します。私たちがあなたに祈り、あなたを礼拝する者であり続けることが出来ますように、聖霊がこの群れを守り導いてください。

主よ、あなたがされたいことのために私たちを用い、主の証人として終わりの日まであなたと共に歩ませてください。今日この礼拝に集められた私たちに聖霊を降し、新たに出発する者としてください。

私たちの救い主、イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:405「すべての人に」

聖晚餐 使徒信条の告白 和解の挨拶

讃美歌:79「みえにわれらつどい」

献金・感謝(福田啓三)・主の祈り(讃美歌 21 93-5A)

父なる御神さま、本日は私ども教会の創立 100 周年の記念礼拝としてお献げすることが赦されましたことを感謝申し上げます。長い間、あなたの御導きと、また恵みの中で過ごして参りました私どもの教会ですが、様々の怠りや躓きにも拘らず、あなたが今日に至るまで、こうしてお導きくださり、100 年の時を迎えることが出来ましたこと、心から感謝申し上げます。

説教を通して、私どもが礼拝共同体として、この世にあってあなたを証しし、地の果てまで、そして御国が来るまで歩むことを、お勧め、受けることが出来ましたことを感謝致します。どうぞ、私どもがあなたの証人として、全ての、弱き力ではありますが、注いで主に仕え、主を証ししていくことが、この後も赦されますように、どうぞ一人ひとりを御導き、また励ましてくださいますようお願い申し上げます。

また、本日は、主の聖餐に与り、主の十字架の贖いと復活の力を深く覚えることが赦されましたことを心から感謝申し上げます。

ここに献げましたものをどうぞ、あなたが祝福して宣教の業のためにお使い下さいように祈ります。また、「主の祈り」を共に祈り、一週間の歩みを始めることをお赦しくくださいますように祈ります。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌 90「主よ、来たり、祝したまえ」

派遣と祝福(司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべきか。 会衆:私がここにおります。私をお遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。)

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたが一同と共にあるように。アーメン。

報告:(1)花の日献金、次週『感謝の祈り』カードの持参要請。(2)創立 100 周年記念写真、祝会までの案内など。

後奏:「いざもろ人神に感謝せよ」(J.S. パッハ)